

AI 活用フィールドマップ白書（V4 整正版）

－ AI ロードマップ・AI 人材育成の基盤情報 －

2025 年 11 月

EmzStyle 合同会社 代表 前田 稔

© 2025 EmzStyle LLC

摘要

本書は、企業の AI 活用を体系的に整理し、AI ロードマップ策定や AI 人材育成の基盤となる情報を提供する白書である。EmzStyle が提唱する AI 活用フィールド構造（フィールド 0～5）は、単なる自動化ではなく「知識→構造→行動」という知の進化プロセスを示すものである。各フェーズに応じたユースケース、人材、システム要件を明確にし、企業が段階的に AI を活用・内製化していくための実践的指針をまとめている。

第 1 章 AI 活用フィールド構造（Field Map Ver.3）

AI 活用は単なる「自動化」ではなく、知識→構造→行動という知の進化プロセスで段階的に進化する。以下では、Field-0～5 の定義・ユースケース・実施内容・必要人材・システム要件を体系的に整理する。

Field-0：外部知識依存型（Prompt-Only Field）

外部 LLM（ChatGPT 等）の知識のみを利用する最初の段階。社内データを使わず、主に言語的発想・表現支援を担う。

主なユースケース

- メール文／議事録要約の生成
- 提案書のたたき台
- 一般的な FAQ 回答や教育資料作成

実施内容

- 社内で安全に利用できる生成 AI 環境を整備（API 利用／プライベートモード）
- Prompt 設計トレーニングを実施
- 出力の再利用ルールを明確化（著作権・情報漏えい対策）

必要人材

- プロンプトデザイナー／AI ユース推進担当
- 情報セキュリティ管理者

システム要件

- - セキュアな生成 AI 接続環境
- - 出力ログ／利用者管理

Field-1：個人文脈結合型（Personal Context Field）

自分が保持する過去資料・議事録・メモを活用し、自分の思考文脈で AI を使う段階。
個人最適ではあるが、実務効率が大きく上がる。

主なユースケース

- 過去提案書＋条件変更で新ドラフト作成
- 議事録＋次回テーマから会議アジェンダ生成
- 顧客履歴からメール提案文作成

実施内容

- 個人データ整理（フォルダ構成・命名ルール統一）
- AI への Context 提供フォーマット整備（例：議事録テンプレ、Definition Contract）
- 出力の保存・再利用ルールの標準化

必要人材

- 各部門の AI リーダー／情報管理リーダー
- ユーザー教育担当

システム要件

- 個人データ接続（OneDrive, Notion, Teams 等）
- 軽量 RAG または Context Memory 環境

Field-2：社内情報探索型（Enterprise Retrieval Field）

社内横断で情報を検索・再利用。データが散在している企業では、この層の整備が構造化 AI の前提となる。

主なユースケース

- 類似案件検索／ベストプラクティス抽出
- 過去プロジェクトの要約
- ナレッジ DB 自動参照による Q&A 生成

実施内容

- 社内ドキュメントのメタデータ化（部門・年度・顧客・案件タグ）
- データ統合ハブ／ナレッジ検索基盤の構築
- 検索精度を上げるための用語定義（Definition Contract）整備

必要人材

- 情報アーキテクト／ナレッジマネージャ

- 各部門データオーナー

システム要件

- RAG 検索基盤（Azure AI Search, Elastic 等）
- ファイル連携 API（Teams／SharePoint／Box 等）
- アクセス権制御／監査ログ

Field-3：構造化生成型（Structured Generation Field）

構造化された社内データやルール群（Definition Contract／テンプレート）を基に正確で再現性のある生成を行う。

主なユースケース

- 社内ルール準拠の提案書・報告書生成
- 定義辞書を参照した要件書生成
- 社内マニュアルをもとに自動説明文作成

実施内容

- 社内データの構造化（データ辞書／タグ／コード体系）
- Definition Contract 運用（定義・除外・閾値・責任者・更新日管理）
- テンプレートドリブンな生成プロセス設計

必要人材

- データアーキテクト／AI エンジニア
- ルール設計者／情報管理責任者

システム要件

- 構造化 DB＋RAG＋テンプレート管理基盤
- ベクトル DB／社内ナレッジグラフ
- 更新ワークフロー管理

Field-4：対話型フィードバック AI（Interactive Validation Field）

AI が人間の入力内容を理解・検証・助言する段階。マニュアルや熟練知を内包し、AI が共創パートナーとして働く。

主なユースケース

- 人事評価コメントの自動添削（評価軸との整合）
- コード・データ定義レビュー（命名・整合・粒度）
- 安全計画書レビュー（過去インシデント参照）
- 提案書チェック（DR ルール・ガイドライン準拠）

実施内容

- マニュアル／ルール類の RAG 化

- 評価ロジックの明文化（Rule-based+Embedding）
- 対話設計（レビュー→改善→再生成ループ）

必要人材

- 熟練者／レビューワー（知識移転元）
- AI 設計者（評価ルール／Prompt Flow 構築者）

システム要件

- 対話型 RAG（Chat+構造検証モジュール）
- コメント／改善履歴ログ
- 検証テンプレート管理

Field-5：思考誘導・ガイド AI（Cognitive Guide Field）

AI が人間の考え方そのものを支援。知識ではなく、判断・構造化・抽象化のプロセスを導くフェーズ。

主なユースケース

- 要件定義／評価設計のガイド AI
- 教育 AI：新任者にマニュアル＋事例を対話的に教示
- 意思決定支援 AI：仮説構築→検証→代替案提示

実施内容

- 思考テンプレート設計（目的／評価基準／仮定検証）
- 行動知性モデル構築（Signal→Infer→Run→Verify）
- AI との対話記録をフィードバック学習に活用

必要人材

- メタ思考トレーナー／教育設計者
- 構造知性アーキテクト

システム要件

- 対話記録・再学習モジュール
- 意思決定支援インターフェース
- 教育コンテンツ連携

全体俯瞰：AI 活用フィールドマップ

AI 活用の全体像を以下にまとめる。

フィールド	名称	主対象	構造化度	対話性	主な目的	主要人材	主要技術
Field-0	外部知識依存	外部 LLM	無	低	文書生成	Prompt デザイナー	LLM
Field-1	個人文脈結合	個人データ	弱	中	個人最適生成	各部門 AI リーダー	Context Memory
Field-2	社内情報探索	社内データ	中	中	横断検索・要約	情報アーキテクト	RAG／検索基盤
Field-3	構造化生成	構造化社内データ	高	中	根拠付き生成	データアーキテクト	RAG＋テンプレ
Field-4	対話型フィードバック	熟練知モデル	高	高	入力検証・レビュー	AI 設計者／熟練者	Chat＋Rule＋RAG
Field-5	思考誘導・ガイド	教育・意思決定	超高	非常に高	判断・構造支援	構造知性アーキテクト	Cognitive AI／Dialog Flow

AI の本質的価値は、生成ではなく「構造と意味を扱う知的補助輪」になることにある。企業はこのフィールド構造を意識して、データ・人材・システムを段階的に整備することが成功の鍵である。

また、主要技術に関してだが、全てにおいて **Prompt** 技術（構造化）が必要となる。（RAG はこの延長として考える。）

第2章：AIを支える構造人材アーキタイプ

AI導入を成功させるには、単にツールを使うことなく、組織内に構造を理解し設計できる人材を持つことが鍵となる。その中核を担うのが「アーキテクト」と「データガバナ」である。両者はAIを企業知へと昇華させる基盤であり、AIガバナンスと持続的価値創出のために不可欠な存在である。

1. アーキテクト (Architect)

アーキテクトは情報構造と業務構造を橋渡しし、AIを活用できる全体設計を担う。業務プロセス、データ、技術基盤を有機的に結びつけ、再利用可能な知の枠組みを定義する。

主な役割：用語定義、データモデリング、業務構造設計、RAG設計、プロンプト構造設計。

2. データガバナ (Data Governor)

データガバナは、情報資産の信頼性を担保し、組織全体でデータ品質・セキュリティ・権限管理を維持する。AI時代の信頼性基盤を作る「番人」としての役割を果たす。

主な役割：データ定義管理、アクセス権限管理、変更履歴追跡、ログ監査、定期レビュー。

3. 経営が理解すべきポイント

AIの正確さはモデルの賢さではなく、構造とデータの正しさに依存する。そのため、アーキテクトとデータガバナを社内で育成することが、AIを単なる導入から企業知能へと進化させる条件となる。

第3章：ユーザにおける AI 活用成長モデル

ユーザ側において AI 活用成熟度は以下の 6 段階に整理できる。

レベル	特徴	主な層
Lv.0：未接触層	AI に触れていない／敬遠する層。	約 30%
Lv.1：ツール利用層	ChatGPT などを便利ツールとして単発使用。	約 50%
Lv.2：業務支援層	議事録・提案書など業務支援で部分活用。	約 15%
Lv.3：構造活用層	自分の思考を AI に投影し、構造的に検証。	約 4%
Lv.4：共創設計層	AI を外部知能として共創・理論構築に利用。	約 1%
Lv.5：再帰思考層	AI に自らの思考構造を教え、進化を共にする。	0.1%未満

注) Lv.3→Lv.4 への進化には、構造知性・抽象化力の育成が不可欠である。

これに合わせた教育計画が必要となる。

第4章：AI活用フィールド別 KPI とチェックリスト

各フィールドに対して設定可能な KPI を整理し、進捗と成果を定量的に把握できるようにする。

Field-0（外部知識依存）

- 生成文書の利用回数／部門数
- プロンプト改善率（改定回数）
- 作成時間短縮率（例：メール作成時間）

Field-1（個人文脈結合）

- 個人データ利用率（ユーザ当たり資料数）
- ドラフト生成数／保存数
- ユーザ満足度／再利用率

Field-2（社内情報探索）

- 類似案件検索数／月
- メタデータ登録率（タグ・分類登録）
- ドキュメント横断検索利用率

Field-3（構造化生成）

- データ辞書登録率（定義済み項目数／全項目数）
- テンプレート準拠率
- 生成ミス率（ルール違反件数）

Field-4（対話型フィードバック）

- AI による修正提案件数／レビュー件数
- 人間-AI 対話回数／案件
- 初稿→最終稿修正回数減少率

Field-5（ガイド AI）

- 思考ガイド利用数／教育セッション数
- ユーザ評価スコア
- 意思決定支援 AI 利用案件数／事業成果関連率

経営層向けショート KPI リスト（重点3項目）

1. AI 活用率（部門・利用者単位）
2. データ定義・構造化率（整備済み定義項目／全体項目）
3. 構造準拠生成率（テンプレート準拠・ミス率低下）

第5章：ROIの再定義－AI時代の競争優位は構造と持続知から生まれる

従来のROI（投資対効果）は、短期的なコスト削減や効率化を中心に定義されてきた。しかし、AI時代においては、この考え方では持続的な競争優位を維持できない。AIの導入効果を一過性の成果として捉えるのではなく、組織知の再構成と再生産を通じて“知的資産”を形成していく必要がある。

1. 外資系コンサルの限界－効率ROIからの脱却

多くの外資コンサルティングファームは、AI活用のROIを「導入コストに対する短期的成果」として定義している。このアプローチは初期導入やスケール判断には有効であるが、AIが企業知として定着しないという課題を残す。効率化に成功しても、構造や知識が外部委託や個人依存に留まれば、成果は持続しない。

2. EmzStyleモデル－構造知性による再定義

EmzStyleが提唱するAI経営モデルでは、ROIを単なる費用対効果ではなく、組織の知的再構成力の指標として再定義する。これを「Intellectual Return on Intelligence」と呼ぶ。

また、競争優位性は他社よりも早くAIを導入することではなく、自社の構造・知識・人材を継続的に再利用・再構成できる能力にこそある。

この視点から、AI活用の最終目的は「効率化」ではなく「構造化と再構成力」であり、知的資産としてのROIを継続的に再生産することに重きを置く。

3. 経営への示唆

経営者は、AI導入を技術投資として見るのではなく、知の再生産システムの構築と捉える必要がある。これには、構造を設計するアーキテクトと、秩序を維持するデータガバナを中核とした内製化体制が不可欠である。この体制が整えば、AIは単なる支援ツールから、組織の「構造的知能」へと進化する。

4. まとめ－ROIを再生産する組織構造へ

ROIを上げることが目的ではない。ROIを再生産できる組織構造をつくることが目的である。AI導入の最終ゴールは、ツールを使うことではなく、知を構造として残し、次の創造に活かすことである。

このアプローチこそが、EmzStyleが定義する「構造知性経営」の本質であり、AI時代の持続的な競争優位を生む新しい経営思想である。

本ホワイトペーパーについて

本ホワイトペーパーは、
前田 稔（エムズスタイル LLC）による独自の調査・分析および
構造知性フレームワークに基づき作成されています。
本資料は、特定の解決策や結論を提示するものではなく、
判断に必要な構造や視点を整理することを目的としています。

著作権・利用条件

本資料に含まれる文章・図表・分析内容・構造フレームワークは、
著作権法および関連法令により保護されています。

本資料の利用条件は、以下に定める

「ホワイトペーパー利用規約」に従うものとします。

 <https://emz-style.com/whitepaper-terms>

利用区分の概要

- 無料版（要約・抜粋）
社内共有・紹介目的での利用は可能です（改変・商用利用不可）
- 有料版（個人）
個人学習目的に限り利用可能です（社内共有不可）
- 法人向けライセンス
社内での配布・研修・教育用途での利用が可能です

※詳細は上記利用規約をご確認ください。

最後に

本資料をお読みにになり、

- 判断に迷う点がある
- 自社の状況に当てはめると違和感がある
- このまま進めてよいのか確信が持てない

と感じられた場合は、

それ自体が重要なサインです。

ご相談・ご質問は、以下よりお気軽にお寄せください。

 <https://emz-style.com/contact>

（※法人向けのご相談・講演・研修のご依頼もこちらから承っています）